

城内 実の視点！ 時代を考察する(6)

—パフォーマンス型政治をやめよ—



前衆議院議員・拓殖大学客員教授 城内 実

参議院選挙の告示日である七月十二日にこの原稿を書いている。「耀」八月号がみなさまの手に届く頃には参議院選挙も終わっていることであろう。有権者が賢明な判断を下したと信じている。

参議院選挙の争点は、国政全般にわたるものでなければならぬ。が、今回は前回の衆議院の郵政解散総選挙と同様に「年金問題」と「政治とカネ」だけしかとりあげない「シングルイシュー」選挙の様相を帯びている。本来であれば、憲法改正、教育問題、外交・安保といった問題を全面に押し出して「戦後レジームの脱却」を図っている安倍政権の信任を問う形での選挙でなければならぬはずである。また、これから本格的に議論される消費税の導入の是非が当然争点の一つにならなければならない。

ところが、マスコミははじめ世論（これも多分につくられ、操作されたものであるが）は「年金」、「政治とカネ」にだけ目を向けている。不思議でならない。小泉前総理の劇場型選挙の一例がほぼそのまま踏襲されている。○か×かの選挙。ものごとはそんなに単純ではないはずなのに。

前政権の大衆迎合的なパフォーマンス型の政

治のつけがまわってきたのである。評論家の西田先生は、衆愚政治に翻弄されている日本人を日本列島をもじって「列島人」と名付けた（もちろん「劣等人」にかけて）。

「パンとサーカス」のローマ時代末期と同じく、今の日本社会も利根的、頹廢的になっており、病んでいる。政治もただおもしろければ良いという中身の無い劇場型、パフォーマンス型に墮している。末期症状である。

主要政党は今回の選挙でも知名度の高い、いわゆるタレント候補を全国区に立てている。こういった目玉候補が集票マシンとなって全国比例区当選者数の底上げを図っている。そのタレント候補が本当に国政を担う議員としてふさわしいかどうかというよりも、最初に知名度ありきである。票さえ集まれば何でも良い。そういうタレント候補者も与党に所属し、当選回数を重ねれば、よほどのことがない限りエスカレーター式に大臣政務官、副大臣、大臣になるのである。有権者もなめられたものである。

日本の政治はもうだめなのか。日本もおしまいか。私は意外と楽観視している。ここまで墮ちるところまで墮ちればあとは上昇するし

かないからである。なにごとにも従順で言あげをしない日本人も、「カイカク」という名の「改悪」によって、生活が改善するどころか、どんどん苦しくなっている現実にあつていずれ重い腰をあげて正しい「改革」に向けて立ち上がるであろう。不満はいつか爆発する。

それもそのはず今の日本の「カイカク」は、グローバリズムによって毒されているからである。グローバリズムがもたらしたものはアメリカ的な弱肉強食型の市場原理主義である。その一つである株主至上主義は、「労働による富」ではなくて、投資ファンドなどによる「カネがカネを生む」ばくち型の経済をはびこらせている。

あくなき物質所有欲が拜金主義を生み、金儲けのためには手段を選ばない。前回でも述べたように、表面ではコンプライアンスと言いながら、ばれなければなにをしても良いという風潮を生み出した。ほんの一握りの勝ち組と大多数の負け組の二極化現象が進み、貧富の差が広がり、格差社会が到来している。

パフォーマンス型の政治のおかげでこのあやしい「カイカク」の本質を多くの国民がまだ見抜いていない。マスメディアにも大いに責任が

ある。マスメディアの多くは第四の権力と化し、憲法で保障されているはずの報道の自由や国民の知る権利よりも、市場原理主義を頑なに突き進み、金儲けに走っている。

私はこれまでいわゆるITには弱かった。どちらかというアナログ人間である。しかしながら、最近自分のホームページ (Kichichi@m-kichichi.com) を新たに開設したことをきっかけに始めてインターネットの世界の奥の深さを知った。インターネットの世界には匿名で根も葉もない誹謗中傷も数多く書かれている。しかし、そこには既存の大手新聞やテレビ局が、特定の大企業や団体からの無言の圧力に配慮して自主規制して報道されない真実がこっそりと書かれていたりする。いわば新聞に対する週刊誌の役割を果たしているのである。

大手メディアもこのまま自分たちの利益だけを追求する商業主義路線を突き進めば、いずれインターネットの世界に飲み込まれ、雲散霧消するであろう。

真の改革とは、自国の伝統文化を大切に、できるだけ地域共同体を壊さないように、日本人に内在する「和の精神」や「共存共栄」をむねとす

るものでなければならない。借り物のグローバリズムを範とするような「カイカク」はいずれ破綻するであろう。いや、もう破綻しかかっている。われわれ日本国民は、あやしいパフォーマンス型のうわべだけで中身のない政治にだまされず、ほんものにとせものを峻別する正しい目をもたなければならない。

プロフィール

城内 実 (きうち みのる)

昭和四〇年 四月一九日生まれ

平成元年 東京大学教養学部国際関係論分科を卒業し、外務省に入省

平成二年 在ドイツ日本国大使館勤務

平成九年 天皇陛下、総理等のドイツ語通訳官

平成一四年 外務省を退官し、公募に応募

平成一五年 衆議院議員初当選 (無所属)

平成一六年 党改革実行本部幹事

平成一七年 農林水産委員会委員、環境委員会委員、郵政民営化特別委員会委員

平成一七年 第四十四回衆議院選挙にて七四八票差で惜敗

平成一八年 拓殖大学客員教授